



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	北海道の踏鋤
Author(s)	林, 善茂
Citation	北海道大學 經濟學研究, 29(1), 37-59
Issue Date	1979-03
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/31442
Type	departmental bulletin paper
File Information	29(1)_P37-59.pdf



北海道の踏鋤

林 善 茂

は し が き

北海道の南部においては、古くから漁業や林業や駄送のかたわら、踏鋤をもって耕起する一種の畑作がおこなわれていた。それは文献資料や古老の伝承等から推察して、北海道における和人の農業の最古の形態であって、おそらく道南の一角に和人の定住村落が発生した室町時代にまで、さかのぼるものと考えられる。

したがって、踏鋤は北海道における和人の耕作用具として最も古いものといえるが、道南地方では大正の初期頃までは一般的に使用されていた。しかし、その頃からプラウ（洋犁）が普及したために、小規模な自給畑以外では、余り使用されなくなったが、さらに戦後、自動耕耘機の導入によって、これらの自給畑においても殆んど使用されなくなり、廃物として納屋の片隅などに、わずかに残存するにすぎなくなった。

そのため現在では、道南地方でも、踏鋤の製作、使用について経験を有するのは、大体80才以上の人々にかぎられる。これらの人々が健在の間に調査をしなければ、北海道における和人の最古の農具である踏鋤について、その詳細を知ることとは殆んど不可能となる。

そこで本年4月以降、道南の松前町、大野町、厚沢部町等を中心に、各地の古老から踏鋤について聞き取り調査をおこない、現物の形態や寸法についても測定をおこなったが、その結果にもとずいて、北海道の踏鋤の実体を明らかにしたいと思う。

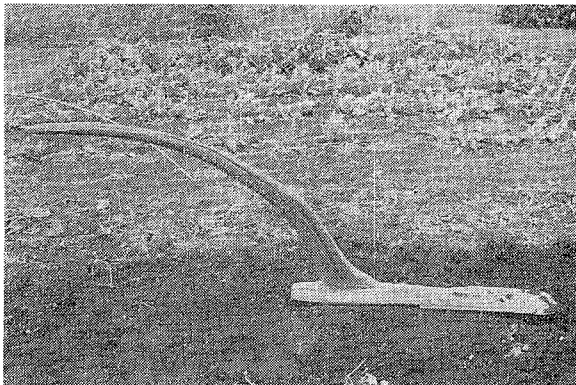
本州の踏鋤については、国立民族学博物館の中村俊亀智教授によって詳細¹⁾な研究がなされているが、北海道の踏鋤については、まだ本格的な研究がな

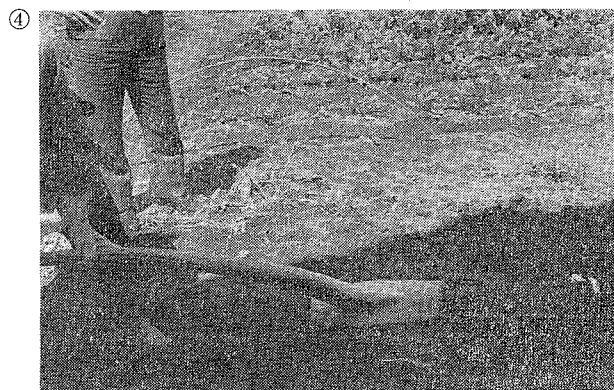
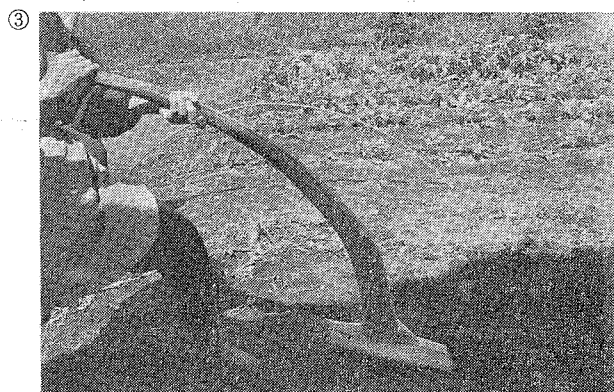
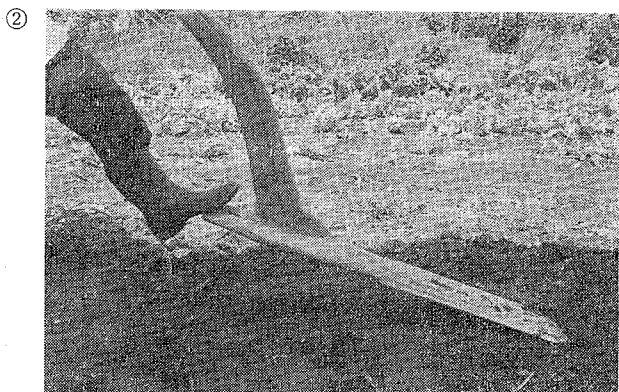
されていないようである。したがって、この報告が本道における和人農業の初期の姿を明らかにするだけではなく、鋤よりも古い農具とされる鋤中心の農法が、いかなるものであったかを知る上に、幾分でも役立てば幸いである。

踏鋤に関する貴重な体験と見聞をお話し下さった沢田鶴松氏(松前町上川)、堀川 弘氏(松前町茂草)、伊藤英夫氏(松前町江良)、竹部三郎氏(大野町東前)、花巻源一郎氏(大野町市渡)、横山市次郎氏(大野町本郷)、内田ミサ氏(大野町本郷)、長川清悦氏(七飯町峠下)、沢口チヨ氏(厚沢部町南館)、西山征一氏(厚沢部町城丘)、北 盛二氏(厚沢部町赤沼)、杉村玉造氏(厚沢部町赤沼)、川村伊三郎氏(厚沢部町鶉)、木村七郎氏(厚沢部町鶉)、横山トキ氏(岩内町清住)に、厚く御礼を申し上げますとともに、調査の遂行に御協力を頂いた松前町教育委員会の永田富智氏、久保 泰氏、大野町教育委員会の中川 諭氏、三上敏一氏、厚沢部町教育委員会の沢田幸男氏、松谷 晃氏、岩内町教育委員会の庄崎之男氏、前田 勇氏、よいち水産博物館の徳田益庸氏、浜益郷土資料館の石山竹司氏に、深く感謝する次第である。

なお、北海道開拓記念館の所蔵資料の調査にあたっては、犬飼哲夫館長、大石雅二特別学芸員をはじめ、多くの方々より格別の御配慮をいただき、また現地調査にあたっては、大野町史の編者飯田吉次郎先生、厚沢部町史の編者新明清先生より、多大の御教示を受け、さらに柄角の測定をはじめ踏鋤計

①





①踏鋤, ②～④踏込みから反転まで, 操作は厚沢部町南館の沢口チヨ氏。53年8月23日撮影。

測の基本に関して、北大農学部教授岡村俊民先生より懇切な御指導をたまわった。ここに記して、心から謝意を表する。

1. 踏 鋤 の 名 称

(1) スキの名称

北海道の南部、渡島、桧山地方では、古くから畑をおこすのに、踏鋤が使用されてきた。これらの地方では、この踏鋤を一般にただスキと呼んでいる。特にフミスキとはいわないが、フミスキといっても通ずる場合が多い。また、一部ではフミクワ、スキクワと呼ばれることもあったようであるが、一般的ではなかった。

(2) スキサキおよび各部の呼称

スキは鉄製の部分と木製の部分とからできている。スキの鉄製部は、一般にスキサキと呼ばれているが、スキガネ、サキガネと呼ばれることもある。スキサキの先端は、直線形に刃がついているが、この部分をハまたはハサキという。スキサキの上部は、真中からやや下のあたりから、2つに分れている。この2つに分れたおのおのをミミと呼んでいる。左、右のミミの内側には、スキのフロをさしこむ溝がつくられている。この溝を一般にサシコミと呼んでいるが、一部ではダイイリとも呼ばれ、また、たんにミゾと呼ばれることもある。スキサキの側面には通常呼称はないが、ハタリあるいはヨコと呼ぶ場合もある。

(3) スキガラおよび各部の呼称

スキの木製部は一般にスキガラと呼ばれているが、ダイガラと呼ぶ場合もある。スキガラはフロと柄が一体をなした自然木からなり、スキサキにさしこむフロの部分と、弯曲した柄の2つの部分に分かれるが、フロの部分をダイと呼び、フロとはいわない。柄の部分は一般にエと呼ばれているが、テという場合も多く、またツノという場合もある。ダイの前方、スキサキにさしこむ部分をダイノサキと呼び、ダイの後方、スキを踏む時に足をかける部分をアシカケ、アシブミあるいはたんにフミと呼んでいる。なお、柄の根本に

は名前はないが、先端はエサキまたはステと呼ばれている。

2. 踏鋤の材料

(1) スキサキの材料

スキサキの大部分、すなわち地金は、日本古来の製造法でつくられた錬鉄、すなわち和鉄（一名庖丁鉄ともいう）が使われたが、スキサキの先端6cmから10cmくらいは、タマガネとよばれる鋼鉄（ハガネ）を入れる。スキサキの材料は、クワサキの材料と同じであるが、スキサキの方がクワサキよりも大きく、かつ地金が厚く、丈夫にできていた。

(2) スキガラ material

スキガラの材料には、ホオ、ナラ、セン、バッコヤナギ、サクラ、イタヤ、クワなどが使われた。ホオは軽くて枝ぶりがよいので、スキガラの材料として一番よいとされるが、どこにでもあるものではないので、すこし重いナラが一般的にもっとも多く使われた。それら以外では、セン、バッコヤナギ、イタヤなどが、比較的多く使われた。なるべく、軽くて丈夫で、枝ぶりがよい樹種をえらんだ。そのほか、細工しやすく、手ざわりがよく、鋤のさざりがよいことなどが、スキガラの材料をえらぶ条件としてあげられる。これに反して、スキガラの材料として不適当な樹種としては、乾燥すると割れたり、狂ったりしやすいもの。くさりやすく、また折れやすいもの。それに、枝のかたちの悪い木、極端に重い木や堅い木、手ざわりの悪い木、などもさけられた。タモ、ブナ、シナなどは、干割れしやすかったり、くさりやすかったり、それに枝のかたちも悪いので、スキガラの材料には適さず、ほとんど使われなかった。

スキガラの材料としては、かならず幹とその太枝を使い、枝木だけでつくるということはなかった。しかも、幹の太さは直径30cm以上、太枝も付根の直径が12~13cmくらいの太さがなければならなかった。これは、スキガラのダイとしては、側を削り^{がわ}とって丈夫な心材の部分のみを使うため、直径30cm以上の太さを必要とし、またスキのエも、枝を削って一定の角度で適当に弯

曲した形につくるためには、付根の太さが12~13cmくらいなければ、充分でなかったためである。。

因みに、クワガラ¹⁾の材料としては、ハンノキが多く使われた。ハンノキは枝のかたち、すなわち幹と枝との角度が、クワガラ²⁾の曲り具合にちょうど適していたために、一般的に使用された。しかし、ハンノキは湿地帯に生がり、生長が早いので木目が粗く、やわらかく、くさりやすいばかりでなく、木の太さも細いため、スキガラ³⁾の材料としては、殆んど用いられなかった。

3. 踏 鋤 の 製 作

(1) スキサキの製作(修理)

スキサキは、村の鍛冶屋にたのんで作ってもらうが、形態、寸法は鍛冶屋がよく知っていて、どれも同じようにつくってくれるので、特別の場合を除けば、形態、寸法について注文する必要はなかった。スキは後述のごとく、女が主として使うもので、女用が普通であったが、男が使うから大きく、丈夫にしてくれ、といって頼むと、普通よりも幅や長さを大きく、厚さも厚くつくってくれた。それ以外でも、スキサキの幅や長さについて、特に注文することは、ないわけではなかったが、サシコミの形態や寸法は、スキサキの大小に関係なく、それぞれの鍛冶屋によって一定していたので、いう必要はなかった。

スキサキは和鉄でつくられているので、極めて頑丈であって、粗末にしなければ、1代はおろか、2代、3代ともった。ただし、4、5年に一度は、鍛冶屋にたのんで、ハサキに6cmから10cmくらいハガネを足して、といでもらう必要があった。これをサキカケ⁴⁾といった。また、鍛冶屋にサキカケをしてもらう外に、自分でも砥石を使ってハサキをみがいてさきりやすくした。スキは木の根を切っておこしてゆくため、ハサキが切れると切れないとでは、能率に大きな差異があったためである。なお、使ったあとで、土をとって洗ってから、油を塗り、手入れをしておけば、スキサキはいたまず、いつまでもよく切れ、長持ちしたといわれる。

(2) スキガラの製作（修理）

鍛冶屋にスキサキを作ってもらってから、それに合せてスキガラをつくる。スキガラは自家製で、それぞれに材料を採取して、めいめいでつくるのが普通であった。しかし、スキガラの製作はなかなか手がこむので、男でなければつくれず、女にはできない。したがって、一家の主婦が使う踏鋤のスキガラは、その家の主人が作るのが一般的であった。

スキガラの材料は、毎年部落の人々と冬山に薪切りに入ったときに、よいものを見付けてとっておくのが常であるが、木樵や炭焼にたのんで採ってもらったり、あるいは売ってもらうこともあった。山でノコギリで切って採取した材料を、マサカリで荒けずりしてから家に持帰り、何年も納屋などにおいて自然に乾燥したものを、必要な時に取り出して使う。

スキガラの製作は、あらかじめ寸法を計ってスミツケしてから削るが、ナタでけずって大体のかたちをつくってから、ナタの刃を裏返しにして（反対ナタという）削って整形し、サシコミの溝に入れるダイノサキをカンナで削って、溝にぴったりはめこむようにする。エも、ナタで大体かたちをつくったあとを、カンナで仕上げる。スキガラは、エを中心にして左、右均等になるようにすることが大事であった。その外、材料を充分乾燥して、スキサキにダイノサキがきっちりハマるようにし、またスキを踏む時の角度を考えてエの曲り具合に注意し、特にエサキの高さが使用者の腰のあたりにくるように作り上げることなどが、重要なことであった。。

スキガラは既存のスキガラを手本にして、各自製作するのが本来であったが、時には材料を持って行って、上手な人に頼んで作ってもらうこともあった。その際には、物で御礼をしたり、1日スキフミをして御礼に代えることもあった。なお、スキサキは鍛冶屋の店先に既製品が、2・3枚ならべられていることもあったが、スキサキにスキガラのはまった完成品が販売されるということは、殆んどみられなかった。

スキガラは10年ぐらい使っていると、ダイが割れたり、かけたり、へったり、エが折れたりすることがあるので、同じスキサキに新しいスキガラを取

替えて使うことも、すくなくなかった。そのために、予備のスキガラの材料を用意しておくことが、耕作者の心掛けとされていた。

4. 踏鋤の形態と寸法

(1) スキサキの形態と寸法

スキサキはハサキが真直ぐで、両端が角立っているのが、本来のかたちである。北海道開拓記念館や町村の郷土資料室に展示されているものの中には、両角がまるくなっているものもあるが、これは使っている中にハが減って、角がとれて円くなったもので、本来のかたちではない。ハサキの表面は平らであるが、裏面はやや斜めになっていて、鋭利にとがれている。

スキサキの上部は、左、右2つのミミに分れているが、ミミの内側、すなわちサンコミの部分は、一般にU字形、時にV字形に近いかたちに切込まれていて、そこにはスキガラをさしこむための溝が掘られている。溝の断面は逆三角形をなしているが、スキサキをつくる時に鍛冶屋がもっとも手間がかかるのは、この部分である。

ハサキも、ミミの部分も、やや開いて幅が広がっているので、スキサキの真中頃、ミゾのすぐ下のあたりが、もっとも幅がせまくなっている。そのため、スキサキの両側は直線形ではなく、やや内側に弯曲しているが、その方がスキサキが土にささりやすく、またかえす場合にもかえしやすい、といわれている。

スキサキの寸法は、全長55cm前後、刃幅は15cm前後、刃の長さは25cm前後で、サンコミ（U字部）の大きさは幅12cm前後、深さ約30cmぐらいのものが、もっとも一般的であった。

(2) ダイの形態と寸法

スキガラはダイとエの部分からなるが、ダイの形は上からみた場合、足をかける後の部分は真直ぐで幅広く、スキサキにさしこむ前の部分は次第に幅がせまくなって先がとがり、ほぼ舟形をなしているのが一般的である。そしてダイの真中よりも後方にエがついているが、エの根本の断面は、縦長の矩

形がもっとも多いが、舟形のものや、楕円形のものもある。

また、ダイの後端、アシカケの断面は、半月形やカマボコ形あるいは楕円形など、中高の山形になっている場合が多いが、横長の矩形をなしている場合も往々にしてみられる。山形の方が角形よりも、スキを踏む場合に足のあたりがよかったばかりでなく、スキをかえす場合にも都合がよかった、とい³⁾われる。

ダイの寸法は、長さ50cmから60cmぐらい、幅は15cm前後、前方部（ダイノサキからエの付根まで）の長さは30cm前後、後方部（アシカケからエの付根まで）の長さは10cm前後、アシカケの厚さは5cm前後のものが多かった。

(3) エの形態と寸法

エは根本が太く、次第に細くなって、弓形に外側に弯曲し、エサキが使用者の腰の高さにくるように、つくられていた。エの弯曲状態およびエサキの高低が、スキの操作に影響するところがもっとも大であった、といわれてい⁴⁾る。

エの長さは130cmから150cmぐらいであるが、エの付根とエサキをむすんだ直線とスキサキとの角度、いわば柄角をみると、その殆んどは140度から150度前後になっており、またエサキの高さも60cmから80cm前後になっていて、寸法に多少の差異はあるが、スキのエはほぼ同形をなしていることが知られる。

なお、エの根本の断面は、上述のごとく角形をなしている場合が多いが、エの中程から上方にかけては楕円形をなし、先端は楕円もしくは円形をなしているのが、一般的である。また、エの太さも、根本は周囲30cmから50cmとやや差があるが、中程では15cm前後、先端では10cm前後とほぼ一定している。これらはスキの操作上の都合から、エの中程および先端が握りやすくつくられている、当然の結果と考えられる。

5. 踏鋤の種類

(1) 女用と男用

スキが一般的に使用されていた天正の初め頃までは、男は主として漁業、林業、馬迫などに従事し、農業そのものは殆んど女にまかせられていた。したがって、スキを踏むのも、むしろ女の仕事であった。しかし、男でも余裕のある時にはスキフミを手伝い、特に少年時代には母親の命令でスキフミさせられることも少くなかった。そればかりでなく、漁場の雇人が漁期をすぎると、親方の畑おこしに動員され、スキフミをさせられることも珍しくなかった。また、専業の野菜栽培農家では、早くから男が中心となってスキフミを行っていたケースもみられる。

そして、男が時々手伝いをする程度にスキフミをする場合には、女の使用するスキと同じものを使い、スキサキやスキガラの形態や寸法にも全く差異はなかったが、漁場の雇人あるいは専業農家で、男が常時スキフミをする場合などには、男用専門のスキとして、女用よりもスキサキやスキガラの寸法が大きく、その上、頑丈につくられたスキが用いられた。男用は女用よりも、スキサキの幅、長さともに、3～4 cm ぐらい長く、かつ厚さも幾分厚くつくられ、さらにスキガラの材料も、ナラやクワなど丈夫な木が用いられることが多かった。

(2) 常畑用と開墾用

スキは野菜畑など、常畑の耕作に使用されただけではなく、アラキオコシ、すなわち開墾にも使用された。常畑の場合はスキフミというのに対して、開墾の場合はスキオコシといって、これを区別した。開墾の場合は、伐木して火入れをしたあとで、スキを踏んでおこすが、常畑の場合よりも、スキを立てて、間隔をせばめておこす。また開墾地は木の根が多いので、常畑の場合のように片側おこしでは不充分なので、両側に開いておこしてゆく。これを「スキを2枚たてる」といい、開墾の場合にかぎって行われた独特の耕法であった。

開墾用のスキは、非常に力を入れておこすので、一般のスキよりも頑丈につくられ、普通のものよりもスキサキが厚く丈夫にでき、寸法も大きかったが、特にミミの部分が長くつくられていた。またスキガラも、ダイとエとの

角度、すなわち柄角が、普通のものよりも大きく、スキを立てて深くおこすのに、都合よくできていた。なお、ダイの後方部、エとアシカケとの間隔も、普通のものよりも短くつくられ、スキを立てて踏込むのに適していた。

スキが盛んに使われていた時代には、1戸に2、3台あるところも珍しくなかったが、かならずしも常畑用と開墾用とを区別せず、普通のスキで開墾地をおこすことも少くなかった。ただし、開墾地をおこすのは、常畑よりも著しく力を要するため、男がおこすのがむしろ一般的であった、といわれている。⁵⁾

(3) 使いやすいスキと使いにくいスキ

同じスキでも、スキサキやスキガラの作り方いかんで、使いやすいスキと使いにくいスキとがあった。スキサキの形や切れ味は鍛冶屋の腕次第で、耕作者の関与するところではなかった。しかし、自製部分であるスキガラのエの曲り具合や、アシカケの状態、ダイの形態などによっても、使いやすいスキと使いにくいスキとができた。

スキのエはハトムネのかたち⁶⁾に外弯し、柄角が140度から150度前後で、エサキの高さが使用者の腰のあたりにくるものが使いやすい。また、スキのエがダイの左、右にかたよらず、かつねじれずに真直ぐにたっているものが使いやすい。さらに、アシカケの角^{かど}がとれて、足の力が平均的にかかるように作られたものが使いやすい。なお、ダイの表面が山形になっていて、エの後方のアシカケの部分が大きいと平均がとれ、スキを踏み込むにも、土をかえすにも都合がよい、といわれる。⁶⁾

一般に、自分のスキは使いなれているので、使いやすいのが普通である。しかし、他人から借りて使う場合でも、それぞれくせがあって、使いやすいものと、使いにくいもの⁷⁾とがあり、客観的にも使いやすいスキと、使いにくいスキとがあったことは、否定できない。使いやすいスキは踏みやすく、かつかえしやすいので、長く使っていても疲れが少ないが、使いにくいスキは身体に無理がかかるので、疲労しやすく、能率も上らなかった。⁷⁾

6. 踏 鋤 の 用 途

(1) 常畑の耕起

スキは畑の耕起にもっぱら使用された。古くからスキを使ってきた道南の渡島、桧山地方では、常畑の耕作は、家の付近の野菜畑だけではなく、家から遠く離れた山畑をおこす時にも、スキを使った。また、ナヤバと呼ばれる海産干場は、土地が堅くておこしづらいが、やはりスキでおこした。粘土質の堅い土地でも、馬の入れない傾斜地でも、もっぱらスキでおこした。

スキでおこしたあとで、クワの背部や側面で土塊を砕くとともに畝立をおこない、また播種後の覆土もクワでおこなった。余程小面積で3㎡～6㎡くらいのところでは、クワだけでおこすこともあったが、それ以上大きくなれば、すべてスキを使った。クワは耕起のあとの碎土や畝立など、整地の用具として使われたが、耕起の用具としてはもっぱらスキが使用されたのである。

(2) 開墾地の耕起

常畑以外に、開墾地の耕起にも、スキが使われた。春先に草木を刈って焼いてから、スキオコシをするが、新墾地（アラキ）は土が堅いから、一雨降ったあとでおこすと、おこしやすい。常畑のように左、右交互に片側におこすのではなく、あらかじめ縄を張っておいて、両側に開いてゆく。ただし、2年目からは畝ができるので、常畑と同様に左、右交互におこした。

開墾地は草や木が根を張っているので、常畑よりもはるかにおこしにくく、困難で労力を多く要した。そのため、開墾地は常畑とは異なり、男が開墾用のスキでおこす場合が多かった。しかし、土地が柔らかくておこしやすいところでは、女が普通のスキでおこすこともあった。なお、石ころや木の根の多いところでは、スキで開墾するのは無理であったので、そのようなところではスキを使用せず、唐鍬や窓鍬でおこすこともあった。

(3) 畑の耕起以外

常畑にしても、開墾地にしても、スキは耕起、すなわち畑おこしに使われ、

それ以外に使用されることは、殆んどなかった。漁家などでは、馬鈴薯をつくる場合に、前の年の畝と畝の間、すなわちセキの部分に種薯を植えて、そのままスキで畝をおこすと同時に、覆土するという簡略な農法がおこなわれ、ジゴクマキとよばれたが、それ以外にはスキが覆土に使用されるということとはなかった。また、畑おこし以外に、溝掘りその他にスキが用いられたということも聞かない。

さらに、水田をスキでおこすということもなかった。和犁や洋犁で馬耕する以前には、水田はかならず三本鋤でおこした。ただし、七飯町峠下付近では、水田の苗代をおこすのにスキを使っていたが、化学肥料のない時代には、苗代を深くおこさなければよい苗がとれず、三本鋤では間に合わないの⁷⁾で、スキが使われたといわれる。しかし、その他の地方では、水田耕作にスキが使われた、というケースは見当らない。

7. 踏 鋤 の 用 法

(1) 左右交互・後退・往復耕

スキで耕起する場合、かならず左、右交互に反転して、後方におこしてゆき、1つの畝がおわると、隣の畝に移って、さらに後方に進んでゆくという具合に、往復しておこすのが普通であった。しかし、傾斜地をおこす場合には、平地の場合のように往復耕をせず、もっぱら下から上へと、後向きに上ってゆくようにしておこす。これを「片おこし」といった。ただし、少しぐらいの傾斜の場合には、平地同様に往復することも可能であって、平地よりもかえっておこしやすい、とさえいわれる⁸⁾。また、極めて例外的ではあるが、左、右交互にかえさずに、もっぱら左または右に一方的にかえす場合もあったが、本来のおこし方ではなかった。

耕起の際のスキサキの間隔は30cmくらいはなすが、踏みこんだ時にスキサキは50cmくらい地中に入るので、傾斜を考えても3分の1くらいは重ねておこすことになり、前にすき残した土を後のスキサキでかきおこした。

また、スキサキは畝の真中に踏みこむのではなく、右にかえす時はスキを

畝の真中より右側に片寄せて踏みこみ、左にかえす時はスキを畝の左側に片寄せて踏みこむ。右側にかえす時には、畝の土は7分は右におこされるが、残りの3分は次に左側にかえす時に左におこされる。

大野町などでは、耕起の前に畝の真中をタチ（道南特有の農具で、水田の畦切りなどに使われる）でタチウチしておいておこすと、おこしやすかったともいわれるが、⁹⁾ 一般的におこなわれたかどうかは明らかではない。なお、開墾地をおこす場合には、一般の場合とはことなり、両側におこしてゆくことは、前述のとおりである。いずれにしても、スキはかならず背後に後退しておこし、前向きに前進しておこすということはなかった。前進耕となると、足が起したばかりの畝間に入るので、足場が悪くなり、技術的にも困難であった。

右にかえす時には、右手でスキのエの先を握り、左手でスキのエの中程を握り、左足をアシカケにかけて踏みこむ。左にかえす時には、手足の位置は全く反対になる。なお、上の手は甲を前にして握るが、下の手は甲が前の時も、後の時もあり、その人の得手によってそれぞれであって、きまっていない。後にさがりながら、左右の手をもちかえ、足はかえす側と反対側の足を交互にかけて、リズムにのっておこしてゆく。呼吸が分からないとうまく踏めないが、慣れるとサッサ、サッサとおこしてゆくことができた。

(2) 踏込みの方向と角度

スキは前述のごとく、反転する側にすこしかたよせて、畝に真直ぐに平行して踏み入れるのが普通であった。しかし、時には畝に斜めにスキを踏み入れることもあった。これを「スキをヤの字に踏む」という。ヤの字に踏むと、普通に踏む場合に比べて、スキの底の土が固くならず、したがって、作物の根の伸長を害しない利点があった。そのため、ていねいな人はヤの字に踏んだといわれるが、¹⁰⁾ 一般的ではなかった。

スキはスキのエの付根まで、50cmくらい踏みこみ、15cmから18cmくらいの深さにおこす。余り深くおこすと、下層の耕土以外の土を出すので、かえってよくない。上手な人がおこす場合には、手がきまっているから、一定の深

さに平均的におこせるが、なれない人の場合は深くなったり、浅くなったりするばかりでなく、畝も真直ぐにできずに曲ってしまうことが多かった。

もちろん、土壌の状態によっても深さが異なる。粘土質の土地など、土の堅いところでは深くおこせないが、クロボコ¹¹⁾のように砂質で、土の柔かいところでは深くおこせる。また、石の多いところは、スキの先が石につかえておこしにくく、粘土質の土地よりも更に難儀した。柔かい土地と堅い土地とでは、踏込みの際に一踏みと二踏みのちがいがあったが、大抵は二踏みして踏込む場合が多かった。なお、スキによる耕深は、作物によって余り差異はなく、一様におこしてゆくのが普通であった。しかし、雑穀の場合は比較的浅くおこすが、野菜ことに長葱、牛蒡、大根、馬鈴薯などは、畝上げするので深くおこした。

スキサキの畑の地面に対する挿入の角度は、30度ぐらいが普通であった。深くおこす時には、それよりも角度を増してスキを立て、浅くおこす時には、角度を減じてスキを寝せておこした。スキを立てるか、寝せるかによって、深くも浅くもおこせたが、スキそのものの構造、すなわちエの角度や曲り具合、ダイのうしろのアシカケの状態などが、30度ぐらいの角度で踏込むのに都合よくつくられていた。ただし、踏みこんだあとは、ダイを真直ぐにねせて、15cmから18cmの深さにおこすのである。

(3) 耕土反転の方法

スキを踏込むときには、主として足に力を入れ、手には余力を入れない。しかし、踏みこんでから、耕土を反転する際には、手と腰に力を入れて土をかえす。反転の際の手の位置は、踏込む時とかわらないが、エの先を握る上の方の手にもっぱら力を入れ、下の方の手はそえている程度にすぎない。

反転の場合の要領は、同じ角度で一定の深さに踏みこんでから、スキの台尻を離さずに、スキサキを斜めにおこして、サラサラと土をおとすようにかえすが、もっとも重要なことは、腰を据えてかえすことで、腰がすわっていないと、反転の際に、スキと一緒に転ぶことも珍しくなかった。同じスキを踏んでも、早い人とおそい人と優劣の差があったが、それは主として反転の

際の腰の使い方の上手、下手によるものだ、といわれる。¹²⁾その他、リズムにのって同じ調子でかえしてゆくこと、スキサキが石ころや木の根にひっかかった場合には無理にかえさず、位置をかえてかえすことなどが重要であった。

反転の際の間隔は、前述のごとく30cmくらいで、畑の状態や作物によって異なるということとはなかった。しかし、土の柔かいところはかえしやすいので、自然間隔が大となるが、堅いところはかえしにくいので、間隔が短縮される傾向があった。特に、開墾地の場合は土が堅く、そのうえ石ころや木の根があつてかえしにくいので、15cmくらいの間隔で反転するのがむしろ一般的であつた。またスキをヤの字に踏む場合も、普通の場合よりも距離が短くなり、20cmから25cmくらいの間隔で反転した。

(4) 耕起後の整地

スキで耕起したあとの土塊は、鋤の場合に比べて大きかったので、碎土が重要であつた。特に粘土質の土地の場合には、土を砕くのが容易でなかつたので、ヨコツチ（ツチタタキ、タタキボウともいう）とよばれる碎土専門の用具がもちいられた。ヨコツチは長さ30cm前後で直径7～8cmくらいの横木に、長さ150cm前後で直径4～5cmくらいの縦木を取付けた丁字形の器具で、格別樹種はえらばないが、ナラ、イタヤ、クリなど丈夫な木で作る場合が多かつた。普通はヨコツチの名のごとく、ツチを横にして土塊をたたくが、土塊が大きかったり、堅かったりする場合には、縦にしてたたくこともあつた。しかし、ヨコツチは上からアラタタキするだけなので、底の方にはなお土塊が残るため、これらの土塊はクワで畝立をする際に、さらにクワを使って碎土しなければならなかつた。

しかし、ヨコツチは主として粘土質の土地において使用され、一般の場合にはヨコツチを使わず、スキでおこしたあとを、直接クワで碎土するのが普通であつた。すなわち、クワで土を盛り上げて畝立をする際に、クワサキで草の根を切ったり、土をほぐしたりするとともに、クワの側面や台尻を使って、土塊を細く砕くのである。クワはスキと同様、鉄製のクワサキに、自然木でつくったクワガラをはめたもので、クワサキはスキサキと同じく和鉄で

つくられ、かたちもほぼ同様であるが、寸法は長さ、幅ともに、スキサキの3分の2くらい大きさであった。またクワガラも、ダイの長さが約2分の1、幅が3分の2くらいで、エの長さも30cmくらいは短く、スキガラよりはるかに小型で、柄角は50度前後であった。クワはもっぱら整地の用具であったため、耕起の用具であるスキよりも、軽小につくられていたのである。

畝を立てたあとで、その上にスジ（作条）をつくるのもクワの役目であった。スキでおこす場合、畝幅は普通45cmから60cmくらいであったが、そこに1条もしくは2条のスジを切って、粟、稗、大豆、小豆、馬鈴薯、大根などを、条播または点播する。古くは粟、稗を撒播し、豆類、大根を千鳥に蒔き、馬鈴薯をジゴクマキしたが、後にはいずれもスジを切って蒔くようになった。さらに、播種後の覆土も、豆類は鎌でさして蒔くのでクワを使わず、馬鈴薯もジゴクマキの場合はスキで土をかけ、クワを使わなかったが、その他の場合は、いずれもクワで覆土し、中耕もクワを使用することが多かった。かように、スキでおこしたあとは碎土、畝立、筋切、覆土にはすべてクワが関与し、スキによる耕起がクワによる整地と、一体をなした農法であったことが知られる。

8. 踏鋤の功程

(1) スキの能率

スキによる耕起の能率は、朝7時頃から夕方5時頃までに、5～6アールおこすのが普通であって、8アールも踏めれば上等とされ、女が10アールもおこせば、「男まさり」といわれたが、熟練した人ならば1日に10アールくらいおこすことも、珍しくなかった。

一般に女は12、3才になると、スキフミをさせられたので、男よりもなれているため、女の方が男よりもスキフミが上手で、男が^{ひとつねは}一畝ふむ間に、女は^{ひとつねはん}一畝半くらい踏んだといわれる。もっとも、男女ともに、その人、その人によって差があって、男でも始終スキを踏んでいる人は、技術的にもすぐれ、そのうえ力もあるので、女よりも能率を上げることができた。しかし、そう

したケースは、比較的稀であって、普通は女の方が上手であつたばかりでなく、男よりも根気がよかつたので、能率を上げることができ、仕事もていねいであつた。

いずれにしても、常畑の耕起は、1日に5アールから10アールくらいの能率であつたが、開墾地の場合は、土が堅く、そのうえ木の根や草の根が張っているので、前述のように、スキを立てて、間隔をせまく、両側に開いてゆくため、常畑よりもはるかにおこしくく、労力を多く要したので、1日に2～3アールくらいのものであつた。しかし、2年目以後は、普通にスキを踏んでおこせるので、能率を上げることができた。

(2) スキ耕の特質

耕起の用具として、スキが広く使われたのは、スキが¹⁴⁾鋤よりも、種々の点でまさっていたからである。

スキでおこすと、鋤よりも深くおこせただけでなく、早くおこすことができた。鋤ならば、5～6 cmからせいぜい10 cmくらいの深さが普通であつて、12, 3 cmもおこすとなると、大へんな苦勞であつたが、スキは15, 6 cmくらいは楽におこせ、土壌がよければ、24, 5 cmおこすことも可能であつた。

また、スキは余力をいれずに、リズムにのつて作業することができたので、鋤よりも使いやすく、鋤の倍以上、3倍くらいも能率が上がり、1日に10アール以上もおこすことができた。

その上、スキは、鋤のように身体をまげなくてもよいので、長時間使つても腰がいたまず、仕事を続けることができた。特に、女にとっては、鋤を振り上げるよりも、スキを踏む方が、はるかに楽であつた、といわれている。¹⁵⁾

なお、スキは深くおこせるので、畑の土が柔らかくなり、また畝間に削りとつた草を入れ、その上に土をかぶせるので、土地が自然に肥え、さらに、畝と畝間を年々交替して利用するため、地力の減耗を防ぎ、地力の維持、増進の上からいつても、スキは鋤よりもすぐれていた。

もっとも、スキの操作は、鋤よりも熟練を必要とし、上手、下手による差

は、鋤の場合よりも著しかった。また、スキは鋤よりも、おこした場合の土の塊りが大きかったので、ヨコツチやクワを使って、砕かなければならなかった。耕起後の碎土の重要性も、スキ耕の特質の1つであった。

9. 踏鋤の由来と衰退

(1) スキの由来

本州の踏鋤には、関東型、信州型、南部型の3つの種類があるが、北海道¹⁶⁾のスキは、形態、用法等からみて、南部型に属している。南部型の踏鋤は、東北地方から新潟地方にかけて、広く分布しているが、新潟地方のものは、青森・岩手など南部地方のものとは、やや形態を異にしている¹⁷⁾。北海道のスキは、新潟地方のものよりも、南部地方のものに類似し、いわゆる南部鋤と殆んど差異はない。したがって、道南地方のスキは、南部鋤の系統に由来するものと考えられる。

明治以前における本道移民の大部分は、地理的にもっとも近い津軽および南部の出身者であって、初期の和人農業には、津軽および南部の影響が顕著であった。そして、水田農業においては、古くから津軽出身の農家が、しばしば稲の試作をおこなって、本道米作の先駆となったことでも知られるように、津軽地方の影響がすこぶる大であった。これに対して、畑作農業においては、元禄9年(1696)に松前藩から南部藩に対して、粟、蕎麦、小豆、大豆等の種子の購入を依頼したばかりでなく、古くから厚沢部川流域に南部の農家²⁰⁾が移住して、畑作本位の村落をかたちづくっていたことなどで分るように、南部地方の影響がきわめて強かった。したがって、本道の畑作に、古くから南部の農法が導入され、南部鋤が使用されていたとしても、不思議はないのである。

事実、最上徳内の『蝦夷草紙』(寛政2年、1790)には、大野村の若林儀兵衛によって、当時の道南地方では、スキを踏んで畑をおこすアラキという農法²²⁾が、支配的であったことが、語られている。また、村上島之丞の『蝦夷島奇観』(寛政11年、1799)には、箱館・松前近郷の女子がスキを踏んで畑をお



——「蝦夷島奇観」(寛政11年, 1799) より ——

こし、そのあとをクワで碎土している図が掲げられているが、そこに画かれた²³⁾スキの形態や操作方法からみても、道南の畑作農業において古くから南部鋤が一般化し、使用されていたことが知られる。

したがって、北海道のスキは、本道独自のものではなく、本州の北部、いわゆる南部地方から、畑作とともに伝来された農具といえるのである。なお、本道のスキは道南地方を中心に普及したが、その影響は、西海岸は浜益、増毛²⁴⁾ちかくまで、東海岸は日高方面にまでおよんでいる。²⁵⁾

(2) スキ耕の衰退

スキは江戸時代から明治時代を通じ、さらに大正の初期まで、道南の渡島、桧山地方では、畑の耕起の用具として、もっとも一般的に使用されていた。当時、耕作面積は各戸50アール前後で、自給作物を主とし、販売作物はわずかであったから、農業は殆んど女にまかせきりで、スキを踏むのはもっぱら女の仕事で、男は漁業や林業(伐木、炭焼)や駄馬による運送などで、現金

収入を稼いでいた。

ところが、大正中頃から道南地方でもプラウ（洋犁）が一般化し、耕作面積が150アールないし200アールくらいに拡大し、販売作物が多く作られるようになると、内陸では農業が専業化し、農業労働の中心も女から男にかわり、それとともにスキ耕は急速に衰退した。しかし、沿岸の漁家などの自給畑では、畑がせまいためプラウによる馬耕はおこなわれず、その後においても、依然としてスキが使われていた。

ところが、戦後、昭和30年代になって、自動耕耘機が普及すると、これらの零細自給畑においても、スキに代って耕耘機が使用されるようになった。その上、女子の賃労働の機会が増加するとともに、自給畑そのものを、縮小もしくは廃止する傾向がみられ、特に若い人達の場合には、自給畑の耕作を廃止して、もっぱらスーパー等から野菜を²⁶⁾購入するものが多くなり、消費生活の都会化がみられる、といわれる。こうして、漁家の主婦などによって、細々と続けられてきたスキ耕も、今や消滅寸前の状態にあるが、このことはスキが本来、女子による自給農耕と深く結びついた農具であったことを、物語っている。踏鋤が古くから道南地方において使用され、最近まで継続されてきた理由も、そこにあったと考えられる。

- 1) 中村俊亀智「鋤の諸形態—やや用具論的に—」『史料館研究紀要』第5号、昭和47年3月。中村俊亀智「踏み鋤の二系列—やや用具論的に—」『史料館研究紀要』第6号、昭和48年3月。など。
- 2) 堀川 弘氏（松前町茂草）、内田ミサ氏（大野町本郷）談。
- 3) 横山市次郎氏（大野町本郷）内田ミサ氏（大野町本郷）、北 盛二氏（厚沢部町赤沼）談。
- 4) 沢田鶴松氏（松前町上川）談。
- 5) 川村伊三郎氏（厚沢部町鶴）談。
- 6) 竹部三郎氏（大野町東前）、花巻源一郎氏（大野町市渡）談。
- 7) 長川清悦氏（七飯町峠下）談。
- 8) 伊藤英夫氏（松前町江良）、内田ミサ氏（大野町本郷）談。
- 9) 竹部三郎氏（大野町東前）、花巻源一郎氏（大野町市渡）談。
- 10) 内田ミサ氏（大野町本郷）談。

- 11) 黒色砂質で腐植の乏しい土。
- 12) 川村伊三郎氏(厚沢部町鶉)談。
- 13) 一畝(ひとつね)は長さ10間(18メートル), 畝60本で1反(10アール)とされている。堀川 弘氏(松前町茂草)の説明による。
- 14) 鍬は鍬類一般を指し, 唐鍬, 窓鍬の類をも含むが, クワは古老達の呼称にしたがい, 鉄製のクワサキに木製のクワガラをはめたフロクワをもっぱら指称することとする。
- 15) 沢口チヨ氏(厚沢部町南館)談。
- 16) 庄司英信『改著農業機械学概論』127頁, 昭和39年。
- 17) 中村俊亀智『踏み鋤の二系列』『史料館研究紀要』第6号, 昭和48年3月。
- 18) 『新北海道史』第2巻通説1, 255~256頁。昭和45年。
- 19) たとえば, 松宮観山『蝦夷談筆記』(宝永7年, 1710)に, 「近き頃津軽領の百姓罷越願候て三年田作仕見申候所, 草生能候得共曾て実入無^レ之故打捨罷帰候由の事。」とあり, また坂倉源次郎『北海随筆』上巻(元文4年, 1739)には, 「松前にて田作なき事は土地にあわざるにてはなく, 田作の時節鯁獵と差合ゆへ古来より耕心見るものなきなり。近来津軽者来てヲヨベと云処え少斗り植付心見し処に, 生立はよろしくこえすぎたる斗りにて実のらず, また亀田と云所にて心見けれども同じ事成ゆへ其後稲は出来ざる物にして又心見る者もなし。霜降る事はやきゆへ成べきか。米不自由になきゆへ心を尽す者もなきゆへか。何ぞ出来ざると云事有べきや。」とあり, さらに松前広長『松前志』(天明元年, 1781)には, 「安永八年己亥春正月羽州秋田^{ぼろこ}檻褌子村の農夫成田弥助と云うもの来ることあり, 予も亦兼て墾田の志ありければ其主意を藩主に告て, 是春より右の福島邑の中央を^{ぼく}卜し新田を開墾せしが, 初年なる故にや是歳は甚だ不作せるにぞ, 羽州農夫も覺束なくや思ひけん, 再び来らざりき。然れども凡二十人役ほどもあるべき大新田を空く打棄んことの本意ならねば, 翌庚子の年には津軽農夫をして試みけるに, 是歳は天幸にや二十俵余の新米を得たり, 今年辛丑春より再び早収の靱胤一種を以て試んと今歳専ら用意をなせり。」とある。
- 20) 『新撰北海道史』第2巻通説1, 213頁。昭和12年。
- 21) 平秩東作『東遊記』(天明4年, 1784)に「江差より三里程西南にアッサブという所あり。川添の村にて, 鮭獵はすれども畑作を専らとす。家数千余あり。」「過半は南部山家の負なる百姓移り来て住居す。浜辺の人のごとく金錢沢山につかひすつる事あたはずといへども, 妻子を養ふて飢寒の患を知らず。」とある。
- 22) 最上徳内『蝦夷草紙』(寛政2年, 1790)には「予大野村の若林儀兵衛と云百姓の宅に旅宿せし時に, 耕作の事を尋聞くに荒起を主とするという。予問曰, 荒起とは何の事ぞといへば答曰, 萩, 萩, 薄の繁茂せし畝野を夏の土用中に刈捨て置, 八月の中旬頃に放火して焼払い, 翌春に到りて鋤を踏で畑とす。之を號て荒起と

- はいふと云り。」とある。
- 23) 村上島之丞『蝦夷島奇観』（寛政11年、1799）は広く伝写されているが、函館市立図書館所蔵による畑作の図は『新撰北海道史』第2巻通説1の214頁に載せられている。ここには、北海学園大学北駕文庫所蔵の『蝦夷島奇観・全』を、北海道大学北方資料室が複写したものから、該当図を掲げる。
- 24) 浜益郷土資料館の石山竹司氏によると、館長の菅原末吉氏（浜益村幌出身、71才）は青年時代に踏鋤を使って畑をおこしていたのを見たことがあると言明しておられる。
- 25) 「踏鋤をたずねて」『北海道開拓記念館だより』第6巻第3号、昭和51年11月。の中で、氏家研究職員は日高のえりも町における踏鋤の使用を報告しておられる。
- 26) 堀川 弘氏（松前町茂草）談。